

* 当報告の内容はそれぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

〈研究課題名〉「挑戦性」の人類学：現代アフリカを生きる人びとの実践の探求

(令和7年度第1回研究会)

〈日時〉令和7年4月26日(土) 午後2時～午後6時

〈場所〉AA研301セミナー室／オンライン会議室

〈報告者1〉緒方しらべ(AA研所員)

〈報告者2〉近藤英俊(AA研共同研究員、関西外国語大学)

〈報告内容の概要〉

1) 趣旨説明と研究計画：「挑戦性」の人類学に向けて (緒方しらべ)

まず、昨年10月の審査会用に準備したプレゼンの内容に沿って、審査会で得たコメントをひとつずつ、全員で再確認した。コメントをふまえてすでに改変した点(研究課題名の変更とAA研所員もうひとりの参加)に加え、これからの研究を通じて応答すべきコメントについても議論した。いかにして本質主義に陥ることなく「アフリカ」を語ることができるのかや、2023年3月に本共同研究員の近藤英俊氏が開催したシンポジウム「アフリカの冒険的現代：偶然化に託す希望のチカラ」にて、「冒険」や「移動」する人たちと同じく「移動しない」人の存在にも焦点が当てられたこと、それに関してシンポジウムのコメントーターであった松田素二氏からのコメントの「安定性と流動性というふたつのベクトル」についてなど、意見を交わした。

そのほか、年間スケジュール、3年間のスケジュールのめやす、研究成果の発表方法、科研費申請、次回以降の研究会で読む文献についても検討した。

その後、メンバー全員が自己紹介を兼ねて本研究への展望を述べた。ここでは詳細の記載は割愛するが、「偉業」「交渉可能性／交渉不可能性」「アフリカとアジアとの違いの有無」「必然性／偶発性」「安定性／不安定性」「リスク」「希望」「うわさ」などのキーワードが挙げられた。

2) 神のご加護によって：挑戦的人生に関する一考察 (近藤英俊)

事前に共同研究員に配布されていた「偶然と必然のあいだを生きる：苦境に関する一考察」(近藤2015)、「希望という名の不確実性：ナイジェリアの冒険的世界から」(近藤、未発表論文)、「信頼の問題」(近藤、未発表論文)、「Negotiation (Deal) and Kuuki (空気): Two Approaches to Make Self and Order Contingent」(近藤、近刊)に基づき、「冒険」「希望」「偶然」といったキーワードについて近藤のこれまでの研究と考察を共有した。

医療人類学を専門としてきた近藤は、つらい病気を経験していたり、不幸に直面したり

する苦境にある人達の現実感について、バイロン・グッド (Good 1994) (グッド 2001)、スーザン・ホワイト (Whyte 1997)、アーサー・クライマン (Kleinman 2006)、マイケル・ジャクソン (Jackson 2009) らの研究を紹介しながら考察した。これをふまえ、こうした苦境のなかで発生しやすい不確実性や、必然性が欠如した状況、あるいは偶然性が顕在化する状況は、極端な苦境を必ずしも伴わない日々の生活のなかにもあると、近藤自身によるナイジェリアの都市カドゥナでの研究に基づき指摘した。

カドゥナでのフィールドワークで、近藤は、呪医やそのクライアントが失敗を繰り返しながら職や手段を移行していく「流動性」や、その過程で本来の目的や意味とは異なる目的や意味を実現したり、そのために本来の手段とは異なる手段を用いたりする「流用性」や、金銭的利益の追求や利他的な行為において主張の正当性を必ずしも伴わない「交渉」に注目し、これらいずれかの傾向をもつ実践を「冒険的实践」と捉える。この冒険的实践は、アフリカ各地と東南アジアの都市（ジャカルタ）を対象とするアブドゥマリク・シモン (Simone 2004, 2010) の研究にも見られることを指摘する。さらに、これまでアフリカの政治学の領域においてしばしば使われてきた金銭的利益の追求という側面のつよい

「entrepreneur (起業家)」ではなく、苦境にある人たちに加え家計的な部分や賭博性についても包摂しうる「冒険 (者)」を、職業的にも地理的にも、また女性関係も遍歴を重ねて移動し続けながら 18 世紀後半のヴェネツィアを中心に活躍したカサノヴァを指し示す言葉として、社会学者のジンメル (ジンメル 1999) が使う「冒険」から借りて使うことを提案する。

ナイジェリアの人びとの常套句「By the grace of God (神のご加護によって／神が微笑めば)」には、信仰心だけではなく、また、ウェーバーが言うような目的実現型の合理的な生き方ではなく、今を生きることや今を生かすすべ、そのとき、そのときを前向きに生きることが示されており、それは苦境を転々と渡り歩く人たちの心境とも共通する。これはある種の「夢」と表現してもよいかもしれない。最後に近藤は、カドゥナでともに暮らした呪術師 J に近藤が見せた（どこにでもある、しかし J は知らなかった）「手品」と、それを見た J の反応を事例に、ここでいう「冒険」には「わからない」というわくわく感もあり、未知の領域を開くことによって希望をつないでいく姿があること、未知に「本物」や「希望」を重ねる人びとの姿が確かにあることを指摘した。

ディスカッションでは、「未知の領域を開く」や「移動する」ことで希望をつなぐという近藤の事例に対し、ダルエスサラームで視覚を失ったばかりの男性が「動かないことで希望を保っている」事例も挙げられ、「動かないにせよ、動くにせよ、人びとが希望をつなぐために求めるのは不確実性や未知なのかもしれない」という指摘がなされた。加えて、「わからない状態や病の状態を〈冒険〉と捉えるならば、それは賭け事のように聞こえる〈挑戦〉とはまた違うのでは」という、本共同研究課題名の新しいキーワード「挑戦性」を再検討する意見も出た。近藤もまた、彼らがやり始めるときは慎重に慎重を重ねたうへの決断と実行というよりはむしろ軽いことや、あれだけ失敗してもそれでもやり続け

るというのは合理性の範囲では説明できないことを指摘し、その状況は「挑戦」よりもむしろ「冒険」と捉えられることを示唆した。さらに、そうした冒険的实践の担い手の周囲の人びとはそれをどのように捉えているのか（すごく迷惑で、信頼できない、と思っていないだろうか？）という意見も出た。これに対して近藤や参加者たちは、確かにその通りであると合意する。他方で、ナイジェリアの夜行バスのなかで起きた警察官によるカツアゲの事例のなかで、冒険的实践の担い手である（危うくカツアゲされるところであった若者を助けた）老人の交渉に、交渉相手であった警察官が最終的に応じたように、交渉はお互いの妥協が前提であるから多少の嘘にも互いにつきあえるし、嘘が許され、交渉の末には仲良くなることすらあると応答した。その意味においては、冒険的实践が周囲や相手にかかる迷惑や不信感よりも、一つの真実を譲らない、正義だけを突き付けるような、交渉の準備がないことこそが、冒険的实践においていちばんの迷惑となる、と近藤は指摘した。

〈研究会全体を通して〉

この共同研究員 12 名で集合したのは初めてであったが、こうしたディスカッションは、近藤氏を囲んで、肩こりがするような緊張感ではなく、わくわくする高揚感のなかで、何度か笑いも誘いながら進んでいった。マラウイを調査地とする東京大学の修士課程の大学院生の方も積極的に参加してくださり、刺激を与えていただいた。司会者のタイムマネジメントの失敗から議論の時間をじゅうぶんとれなかったことは悔やまれるが、このテーマで、この共同研究員で、この研究を遂行していく理由はそろっていると確信する初回研究会であった。